

今月の谷口雅春先生のお言葉

# どのような姿でも、子供は本来善なる生命である

子供は本来、神の子であって立派な子である

人間には仮の相かりすがたと本当の相すがたとがあるのです。仮の相すがた

というのは(中略)、親が心で縛しばっているとそれに反抗する

ために、あるいは操行そうこうがわるくなったり、成績が悪くな

ったりして、周囲の心の反影はんえいとして出てくる、これが仮

の相すがたでありまして、本来その子の操行そうこうがわるいのも学

業の成績が悪いのでもないのであります。人間の本来の

相すがた、本当の相すがたは神の子でありますから、「本来この子は

善い」と、子供の実相じっそう、その本当の相すがたを見て、それを拜

み出すようにしますと——拜むといっても、あながち掌て

を合あわさなくてもむろんよいのですけれども——心で子

供を拜む——「うちの子供は本当に神の子であって立派

な子である。放はなつておいても大丈夫である。決して悪く

なるようなことはないのである」と子供を信じて心で拜

むのであります。〔生命の實相〕頭注版第30巻39～40頁

自分の尺度で子供の善悪を

判断してはいけない

子供を育ててゆく上において、まず心得ておかなけれ

ばならないのは人間は皆一様みないちようのものでないことであります。天分もちがえば過去の念の集積もちがう。われわれは過去何十回何百回と生まれ更かわってこの世に出てきているのであって、その間にいろいろの体験を積み、いろいろの過去を持つています。だから双生児ふたごで生まれた子供でも、同じ環境で、同じ人が同じ食物じよくちつで同じ教育法で育ててもすっかり性質がちがうことがあるのであります。ですから、子供をよくしようと思う時に、大人の、しかも自分みづかみだけの尺度じくどでもって判断しすぎて善悪を評価するといけないのであります。人間というものには皆個性がちがう。個性がちがうところにそこに価値がある。桜の花とバラの花とはどちらが美しいかという、これは評者ひょうしやの好き嫌いで定まるので、桜がいつそう美しいという人もあれば、バラがいつそう美しいという人もあります。それを自分だけの好き嫌いでもって、「お前桜のように、そんなに一晩ひとばんで散るような寂しい姿じゃないかん。バラの花のようにならねばいかん」と言つたところが、それはできないことを望むのであります。

桜は桜でその良さを認め、バラはバラでその良さを認めなければならぬのであります。人を教育するには自分が「こうありたい」という一いつつの尺度じくどをもって、その尺度じくどにちがうものは皆悪いと考え、お前は悪い悪いという批評を加えてゆきますと、その批評の言葉の力によって、その児童の天分は伸びず、「僕は悪いものだ、劣等児だ」という観念を心に植えつけられて、ついにせつかくの天才児も一個の劣等児になってしまうのであります。

（『生命の實相』頭注版第30巻88～89頁）

### 親の心の縛りを解くこと

「自家うちかみの子供は神の子だから必ず善くなるのである」ということを信じて、そのままに見ておいたら、今まで五年間ずっと操行そうこうが悪くて先生から父兄ふけいが招よばれては叱言こごとをいただいていたその子供の操行そうこうが甲こうになってしまった。これはなぜであるかということを考えてみなければならぬのであります。それは親の心が縛らなくなつた

からです。親の心の綱で縛られていると、その縛りを解くために、暴れたり、いろいろ悪戯したりするのですが、親が「わが子は神の子である」と信じて心で縛らなくなった時に、子供はどこにおっても自然とのんびりしたような気持ちになって、それに反抗的に悪戯しなくなったのであります。そのように親が「心の綱」で縛るといふことは非常に恐ろしいものであります。

〔『生命の真相』頭注版第30巻38頁〕

子供に「本当の自分」を言って聞かせること

子供に対しては、「人間は神の子だ。子の顔が親の顔に似ているように、汝の能力と性質とは神の姿に肖せてつくられているのだ。神はこの世界の万物をつくられたのであって、人間は神の子として、神の無限に大きな能力のあとつぎに造られているのだ、だから神の子は神の子らしく生きねばならぬ。神から譲られている無限に大きな能力を発現しようと思わないものは、親から折角頂

いた宝の庫を開かないで棄ててしまうものだ」こういう意味の話を時々言葉を変えて子供に話して聞かせることにして、人間の本性の尊いこと、その潜在能力の無限であることを子供の心に吹き込むようにすれば好いのである。すると、子供は次第に「本当の自分」が如何に崇高く靈妙なものであるかを知りはじめる。そしてその「本当の自分」を実現することが彼の生涯の理想となり、従来の小さな虚栄や、小成に安んずる慢心や、狡利己心は消滅して、本当に彼は謙虚な心持で生長の本道を辿り得ることになるであろう。(中略)

如何に子供の現在の状態が賞めるに値しなくとも、「今に善くなる!」「きつと偉い人物になる!」こういうふうな漸進的進歩の暗示を与えるに相応わしくないことではないのである。そしてその暗示の力で、漸進的にその子供を良化して行くことは吾々の為し得る、否為さねばならない義務であるのだ。

(新編『生命の真相』第22巻161〜168頁)